

出土資料と章太炎「古音娘日二紐帰泥説」

野原将揮

1.

章太炎『国故論衡』「古音娘日紐帰泥説」に「古音有舌頭泥紐、其後支別、則舌上有娘紐、半舌半齒有日紐。于古皆泥紐也。」とある。これは娘母と日母が古音では泥母であったことを意味しており、『広雅』『釋名』等を引いて異文、声訓から古音声母の来源を求めているのが特徴である。現在では諧声系列研究が進み娘母、日母が泥母に帰すことはひとつの通説となっている。では、ここで指す古音とは一体何を指すのだろうか。注意すべきは章太炎が声訓を用いて考察していることである。『中国語学新辞典』によると声訓とは「ある漢字の字義をそれと同音または双声重韻などの近似音の文字で解釈する方法。……戦国末から前漢にかけて陰陽五行説を奉じた思想集団に意図的に利用され……」とある。実際、「国故論衡」においても漢代の『淮南子』『釋名』等が引かれている。つまり章太炎は遡ったとしても戦国末から後漢までの音を求めた事になる。以上のことは、近年注目を浴びている出土資料でも確認することが出来る。

2.

1993年に湖北省荊門市から出土した郭店楚簡、その翌年に香港の骨董市で発見された後に上海博物館に蔵される事となる簡牘が歴史・思想研究にかなりの影響を与えたことは言うまでもないことである(以下、上博楚簡と略称)。出土地に関して、上博楚簡も郭店出土の可能性があると考えられているが現時点では出土地、出土期については確証がない。その郭店楚簡と上博楚簡にはともに対応する内容として「性自命出」(郭店楚簡)、「性情論」(上博楚簡)があり、また両者ともに「緇衣」が含まれていることが確認されている。『上海博物館蔵戦国楚竹書(一)』には郭店楚簡「緇衣」と上博楚簡「緇衣」が並べて掲載されているため比較対照の際には非常に便利である。小稿ではこの「緇衣」を中心に「女」に関連する特に典型的な例を挙げることにする。

郭店楚簡、上博楚簡「緇衣」には幾つかの「女」が現れる。郭店楚簡には計7字(声符「女」も一字として数に含み、その他6字は「女」一字で表記されている)、上博楚簡には計6字の「女」が見られる。上博楚簡は缺簡している部分があるため郭店楚簡よりも1字少ない。これら「女」はどれもが「如」の通假字であり、現在のところ「女」が「如」の通假字として表記されることについては何の問題も無く、極々自然なことと考えられている。

『説文』には次のようにある、

「女」……「婦人也。象形王育説凡女之属皆从女。」

「如」……「从随也。从女从口。」

「如」は『説文』では会意字と看做されている。

しかし、果たして『説文』で言うように会意字だろうか。やはり「女」は声符と考えて差し支えないように思う。また、中古音に投影してみると「女」は娘母で「如」は日母であるから混乱を招くが、楚簡でも通假されていることから「女」と「如」は同じ音、もしくはかなり近い音だったに違いない。上古ではどちらも魚部に属し、中古音韻地位は「女」が娘母遇摂魚韻三開上で、「如」は日母遇摂魚韻三開平である。ちなみに「奴」と「如」が通用している例も楚簡に見られる。それは『上博楚簡(四)』「逸詩」に現れる。

「奴」は泥母遇摂模韻一開平で、『説文』では「奴婢皆古之皐人也。周禮曰其奴男子入于皐隸。女子入于舂蕞。从女从又。」とあり会意字とされる。これにより一層、日母、娘母、泥母がその源を同一とすることが確実になるだろう。以下、それぞれの音価を挙げる。

	Baxter	董同龢	李方桂	鄭張尚芳	上古/中古
「女」	nrjaʔ	n̄jag	nrjagx	naʔ	魚部/娘母遇摂魚韻三開上
「如」	nja	n̄jag	njag	nja	魚部/日母遇摂魚韻三開平
「奴」	na	nâg	nag	naa	魚部/泥母遇摂模韻一開平

3.

上挙した例以外に、郭店楚簡「緇衣」には「女」と「如」が同じ音、或いはかなり近い音であったと考えるに足る証拠が見うけられる。郭店楚簡第19号簡にある部分である。当該部分には「女+口」と隸定される文字、つまり「如」が表記されている。上博楚簡「緇衣」の対応する部分には単独で「女」が表記されている。上述したように、郭店楚簡「緇衣」には計7字の「如」を表す「女」が含まれるが、そのうちの一字が「如」と表記されているのである(「如」以外は全て「女」一字で表記されている)。前後文意から見ても敢えて表記を変える必要性は感じられない。同一の簡牘に「女」(「如」の通假)と「如」が共存して表記されているということは少なくとも以下の2点のことを表している。

- ① 郭店楚簡が表記されたときには「女」を声符に持つ字「如」が日常的に使われていた。
- ② 当時はまだ「女」と「如」は同じ音または相当近い音で読まれていた。また、書く際に区別して表記する必要がないほど近い音である。

このことから章太炎「古音娘日紐婦泥説」を確認し得る証拠であると考えられるのではないだろうか。

4.

しかしながら、日母すべてが泥母に帰すと判断することは出来ないことも指摘されている。例えば、王力(1980)では「上古没有娘母是肯定了、是不是連日母也没有呢?」とし、

幾つかの諧声系列関係を挙げ(例：悪而、乃仍、内芮等々)、日母と泥母の密接な関係を認めつつも必ずしも日母が泥母に帰すとはしていない(王力は舌面的鼻音/n-/としている)。そのほかにも王文耀(2004)も王力と同様に日母と泥母を分けて立てている。王文耀は重文の声符交換状況を表にまとめている。表は王文耀(2004)のものである(ここでいう重文とは音義を同じくするが字形を異にする字を指す。諧声字声読というのは例えば、泥母声符を持つ字Aがどの声母で読まれるかを表す)。

項目 声符	総数	諧声字声読 (%)			重文声符声読 (%)		
		泥	娘	日	泥	娘	日
泥	13	9	7	5	7 (53%)	1	8
娘	15	3	6	0	3	1 (6%)	8
日	33	9	5	20	6	4	17 (52%)
合計	61	21 (34%)	18 (30%)	25 (41%)	16 (26%)	6 (10%)	33 (54%)

重文声符交換において、日母の声符は33例中、17例(52%)が同じ日母声符と交換関係を有するのに対して、泥母声符と交換している例は6例である。泥母の声符は13例中、7例(53%)が同じ泥母声符と交換関係があり、日母とは8例の交換関係がある。

重文声符交換の例；

箒(日)：箒(日) 日母と日母の声符が交換される

絮(泥)：柳(日) 泥母と日母の声符が交換される

表の数字から、重文声符交換において日母は52%が同じ日母の声符を持ちその半数を占めることから、日母には日母の声符を取って交換していると考えられる。王文耀はこの点から日母は独立性が強かったと看做しており、独立性が強いということは日母が泥母とは異なる要素を含んでいたと考えることができる、つまり日母は泥母に帰すとは考えられないとしている。重文声符交換の表からも日母の独立性は見て取れるだろう。王文耀が言うように重文に同じ日母の声符が交換して使われている例が多いということは、日母と泥母には何らかの違いがあったと考えることができる。しかし、泥母が重文声符交換において同じ泥母声符と交換関係が有る例が7例(53%)、一方、日母声符と交換関係の有るものが8例とされており、重文において泥母は日母とも同じ割合で声符交換関係が有ることが見て取れる。さらに諧声字声読の割合もそれぞれ35%前後で日泥娘の三母に平均的に分布しており、使い分けが為されているようには思えない。その点に関して日母は独立性が有るようには思えない。むしろ日母が泥母に帰すと言えるのではないだろう

か。また、王文耀は金文の例を挙げ日母の独立性を論じている。詳細は参照されたい。

以上、小稿では楚簡「緇衣」に頻出する「女」を挙げた。郭店楚簡「緇衣」の「女」「如」、『上博楚簡(四)』「逸詩」における「奴」「如」はそれぞれ相当近い音と看做して差し支えないだろう。但し、王力や王文耀が論ずるように日母の独立という問題点もやはり更なる研究を要するようである。今後、出土資料の増加に伴い明らかにされる点もそれに比例して増加していくだろう。そういった中で一字毎に細かく研究することが必要になっていくだろうと感じる。

声符「女」は声母研究において非常に興味深い点が多い。古屋昭弘(2006)にも見られるように、「女」を声符に持った文字が「泥母・娘母・日母・書母・心母」のように分布することも確認されている。また、詩経音系とそれ以前の音系(諧声符の音系)とを区別するか否かの問題に関して、同一の簡牘と一緒に表記されることから推考しても「女」と「如」は詩経音系以前に含まれるか否かについての区別の必要は無いように思われる。もちろん詩経以前の音系とそれ以後の音系とを分けなければどうして解せない文字も幾つか有る。その事に関しては後に譲ることとしよう。

<参考文献>

- 董同龢『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所 1944
馬承源『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』上海古籍出版社 2001
馬承源『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』上海古籍出版社 2004
李方桂『上古音研究』商務院書館 1980
王力『漢語史稿(重版本)』中華書局 1980
王文耀『殷周文字聲類研究』上海辭書出版社 2004
荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』文物出版社 1998
章太炎『国故論衡』上海古籍出版社 2003
鄭張尚芳『上古音系』上海教育出版社 2003
藤堂明保『中国語音韻論 その歴史的研究』光生館 1980
藤堂明保『新訂中国語学』大修館書店 1985
古屋昭弘「儒教と中国語学—出土文献と上古音—」『近世儒学研究の方法と課題』汲古書院 2006
中国語学研究会篇『中国語学新辞典』光生館 1984 第6版
Baxter William H 1992 *A Handbook of Old Chinese Phonology* Mouton De Gruyter.